

外科 マンスリーレター 2019.06

今月のマンスリーレターを担当させていただきます、大津市民消化器外科の青山太郎と申します。こちらの病院に赴任し、早いもので一年が経過致しました。日々の診療におきまして、皆様には多大なお力添えをいただき、心より感謝申し上げます。

今回は高齢者の大腸癌手術について、拙文ではございますが書かせていただきます。

皆様ご存知の通り、大腸癌は年々増加傾向であり、80歳や90歳の御高齢の方の大腸癌も目にする機会は少なくないと思います。御高齢の方は特に自覚症状がないと、もう十分長生きした、こんな歳になって手術など受けたくない、手術なんか耐えられないと、手術を拒否されることも多いのですが、大腸癌は、もちろん放置すれば命に関わる疾患であるのは他の癌と同じですが、比較的元気で食欲のあるうちから腸閉塞症状を来すことも多く、生活の質を著しく損なうため、御高齢で長生きを望まれない方にとっても手術が必要になることが多いのが現状です。

当院での2015年1月から2018年7月までの3年6ヶ月間に大腸癌と診断され、原発巣切除が行われた患者、283例を検討したところ、約20%が80歳以上の症例でした。80歳以上の方々は、80歳未満の方々に比べて全身状態はやや悪い傾向にはありましたが、術後の合併症（Clavien-Dindo分類の2以上）を起こす割合に有意な差はなく、縫合不全や人工肛門になってしまう割合、入院期間についても大きな差は認めませんでした。

また、当院は積極的に腹腔鏡手術を行い、80歳未満の方々の91%には及びませんが、80歳以上の患者様にも81%の割合で腹腔鏡手術を行っており、傷の小さな低侵襲の手術を提供できていると考えております。

これからも御高齢の方にも安心して手術を受けていただくため、安全な手術を提供できるよう当科一丸となって努力してまいります。もし、手術を嫌がられているような患者様におかれましても、お話だけでもさせていただきますので、ご紹介いただけましたら幸いです。

